

花崎 梶平

ユサンマとトミ

サハリンに流刑された ポーランド人ピウスツキ
アイヌの生活と文化に関心を寄せ

スタロドウプスコエ(栄浜村)のエカシ バフンケと親しくなり
姪のユサンマと出会う

彼はアイヌ語を学び ウチャシクマやユカラを聴き取り
蠟管の録音機で記録した

彼はユサンマを愛し 共に暮らし二児をもうけた

一九〇五年 日露戦争の間に

ピウスツキは ユサンマを残してサハリンを去り独立運動に参加する

一九一八年 ポーランドは百二十三年ぶりに独立した

同じ年 彼はパリで不審死を遂げ

帰ってくるという約束を待ちわびていた

ユサンマは嘆きに暮れて目がつぶれた

二〇一七年春 ピウスツキを想起し 偲ぶ集いが

江別の民衆劇場「ども」で開かれ

小樽の詩人長屋のり子さんが自作の詩

「盲いたシンキンチョウ（ユサンマの別称）の悲歌」を朗誦した
すばらしい朗読だった

その長屋さんが ただ一枚 ポーランドに残っていた

ユサンマの写真を見て トミさんにそっくりと伝えてくれた

トミさんは 私が四〇歳から共に暮らした相手

写真は 帽子を深くかぶって 盲いた目をかくし

顔の下半分だけが見えている写真だった

似ている 頬の線 顎の形 唇や鼻梁

シヌエ（刺青）の有無に違いはあるが

アイヌモシリの北辺の浜辺で育った村山トミに

渡されたのか ユサンマから なにかが

凜とした女性だった トミさんは

アイヌの魂を深く秘めていた

私は彼女を愛し

彼女からこの世の底辺で生きる力をもらった

彼女とともに生きるために

本州の大学からの 四つも五つもあつた招きを断り
食うや食わずの貧乏暮らしを選んだ

しかし私は 彼女の器量に及ばなかった
その繊細で激しい感受性と

徹底して独立自尊を貫く生き方にたじろいだ
三十年のあいだ共に暮らしたが

彼女は一人暮らしを選んで 去っていった

でも私は 今でも彼女とともに生きている

「おトミさん」と呼びかけ

彼女が身近にいるのを感じている

トミさんがユサンマさんと会ったら

二人は嬉々として語り合い

浜で遊んだに違いない

ユサンマもトミも アイヌの女

男に媚びない

愛してと求めない

だけど 自分のほうからの

愛は惜しみない
誇り高い愛

思い出に花を手向けて

うつつを幻にひるがえせば

居るんだね　そこに

腹を立てて戸をボタンと閉めれば

「なんで戸に当たると　戸は悪いことしてないのに！」と

戸をかばい

庭に出ては　花とヒソヒソ何か話していた

蚊やハエが家に入ってくると

「出て行きなさい　出て行かないと殺すんだよ」と

宣告していた

その鋭い瞳で　私を見張っているんだね

私が他の女性を好きになるんじゃないかと

ちがうよ　あなたがなにより

あなたはいつも疑っていたけれど

あなたからその疑いを除いてやりたい

ハグして